

4枚

プラント状況（本店レク） 議事メモ

日時：平成23年5月21日（土）11:00～12:05

場所：東京電力本館3階AB会議室

先方：記者約50名（カメラ4台）

当方：原子力・立地本部

原子力設備管理部

本店広報部

配布資料：

- ・ 東北地方太平洋沖地震による影響などについて
- ・ 福島第一原子力発電所 プラント関連パラメータ
- ・ 福島第一原子力発電所モニタリングカーによる計測状況
- ・ 集中廃棄物処理施設周辺サブドレン水核種分析結果
- ・ 排出基準を超える放射性物質濃度の排水の海洋放出に関わる影響に関する報告書の提出について
- ・ 福島第一原子力発電所第3号機取水口付近からの放射性物質を含む水の外部流出への対応について（概要）
- ・ 福島第一サーベイマップ
- ・ 福島第一原子力発電所3号機 原子炉建屋付近（がれき）の状況

質疑：

Q. 5/10の午前2時から3号機から汚染水の流出が始まったとのことだが、その後で放出につながるような作業をしていたのか。

A. 流出につながる作業等があったわけではない。

Q. 3号機の南側で1,000mSv/hの瓦礫が見つかったとのことだが、瓦礫の素材は何か。また線量が高い理由は。

A. コンクリート片と紙状のものと聞いている。線量が高い理由は定かでないが、水素爆発の際に飛散したガラスに何らかの理由で放射性物質が付着したものと思われる。

Q. 放射性物質の海洋への流出について2号機と3号機を比較してどう評価しているか。

A. 3号機については、放出期間が2日間と比較的短時間であった割には放出量が250m³程度と多かった。ただ汚染水の放射能濃度は2号機と比較して低いことから、総放出放射能量としては2号機より少ない。

Q. 2号機から流出した放射性物質の99.9%が港湾外へ流出したとしている根拠は何か。

A. 2号機は4/1から流出が始まり（発見は4/2）、4/8に止水工事が完了したが、シルトフェンスの設置工事は4/14頃になったことから、その間に拡散したと

思われる。

- Q. 3号機から放出した放射性物質が港湾内に滞留しているという根拠は何か。
- A. 3号機から流出した際にはシルトフェンスが既に設置されていたことから、港湾内に滞留していると思量。サンプリング結果でも取水口付近の数値がほぼ横ばいから若干減少傾向であることからシルトフェンス内に留まっていると考えている。
- Q. ガラで線量が 1,000mSv/h というのは過去最大か。また今後の作業に何か支障はあるか。
- A. 1,000mSv/h は過去最大。ガラに最も近い箇所での作業は、ゾウ1号による使用済燃料プールの水位の確認だが、運転席付近の線量としては問題ないレベルであることから、作業への影響は特段ないと考えている。ガラの撤去については、ゾウ1号を動かすタイミングの5/25以降にガラをコンテナに詰める作業を行う予定。
- Q. 運転席に影響がないという理由は。
- A. ガラと運転席の距離が離れているため。
- Q. ストロンチウムの拡散シミュレーションは実施しないのか。
- A. 基本的にセシウム、ヨウ素と同じ様に拡散すると考えている。また海水中のストロンチウムの核種分析については適宜実施する。
- Q. 図4のCs-137濃度分布シミュレーション結果について、これは計画的に放出された低濃度放射性物質と2号機から流出した高濃度放射性物質を受けてのものという解釈でよいか。
- A. その通り。4月上旬に放出した低濃度の汚染水が約1万tと2号機から流出した高濃度の汚染水約500m³のシミュレーション結果。
- Q. モニタリングポイントは沿岸からどの程度距離があるのか。
- A. 沿岸から最も遠い測定点は90km。その間が15km。
- Q. シミュレーションはどのような緒元を使って解析したのか。
- A. 沿岸海流の流れ、気象条件、黒潮のような大きな海流等をシミュレーションに取り込んでいる。
- Q. シミュレーション計測の範囲は。どこまで放射線物質が拡散しているか。
- A. 南北300km、東西250kmの範囲でシミュレーションしている。
- Q. 当シミュレーション結果の提出を一度延期しているが、実績とシミュレーション結果で合わなかった点はどこか。
- A. 本件は5月2日報告の予定だったが、シミュレーション結果の乖離と3号からの流出があったことから報告期日を延期している。シミュレーション結果と実績が乖離している点としては、シミュレーション結果は東側への拡散が実測値より小さく、その分南側の濃度が濃くなっていた。

Q. 図4のCs-137濃度分布シミュレーションの東西・南北の距離は。

A. 東西 250 キロ、南北 300 キロ。

Q. 深さ方向のシミュレーションはしているのか。

A. 250mの深さまでをシミュレーションしている

Q. シミュレーションのプログラムは既存のものを使用したのか。

A. 大学や研究所で使用実績がある「領域海域モデル ROMS」というソフトを使用している。文科省が使用しているモデルとほぼ同様。シミュレーションしたのは電力中央研究所。

Q. 国のしかるべき機関との調整は行っているのか。

A. 最終結論の確認は行っていないが、解析の過程では文科省の JAMSTEC と情報交換を行っている。

Q. 今後シミュレーションを継続するとのことだが、その頻度は。

A. 今後も実施予定だが、頻度については未定。

Q. 3号機から流出した汚染水の濃度は、外部への放出が許容される放射能量の何倍か。また、高濃度の汚染水という認識でよいか。

A. 保安規定に定める海洋への放出量の基準に比べ約 100 倍。具体的には、1 プラントあたり 3.7×10^{10} ベクレルであり、6 プラント分の 2.22×10^{11} ベクレルが 1 F の基準。今回の放出量は 2×10^{13} ベクレルでありよって約 100 倍ということになる。汚染水の濃度としては高濃度と考えている。なお、10 の 2 乗から 0 乗が中濃度、10 の 0 乗以下を低濃度。

Q. 3号機取水口からの流出への対応について保安院に報告した時刻はいつか。

A. 5/20 の 22 時頃。

Q. 1,000mSv はガラとしては過去最大か。

A. T/B の溜まり水で 1,000mSv/h 超があり、また、1号R/B では 2,000mSv/h はあったが、がれきでは最大。

Q. 漁業関係への報告は行っているのか。

A. 昨日の段階で関係各所への報告は実施済み。

Q. 福島県では漁を自粛しているが、東電からの指示によるものか。

A. 水産庁や自治体の判断かと思う。

Q. ストロンチウムについて拡散のシミュレーションを行わないのか。

A. 海底土のサンプリングを行う中で実態を把握していきたい。ストロンチウムは測定に時間がかかるため他の核種の測定結果が遅れてしまう。また、セシウムに比べストロンチウムの割合は少ないことから、まずセシウム等の分析を優先して実施したもの。今

後、ストロンチウムも加えて総合的に評価していきたい。

Q. 漏れ出たことに対する認識は。

A. 緊急避難的な措置ではあるものの低濃度の海洋放出を実施したこと、2号機では高濃度の汚染水を放出したこと、その十分な対策を行わないまま3号機から放出したことについては誠に申し訳なく思っている。従って、現在、2号トレンチの溜まり水の移送を止めて、取水口まわりの再点検を行っているもの。

Q. 3号機からの流出は、復水器からT/B地下への放出も一因か。

A. その通り。

Q. 1,000mSv/h のガラ サイズは。同様の高線量のガラは他にも出てくる可能性はあるのか。

A. サイズは不明。回収する際にわかる可能性がある。また、今後、無用な被曝を避けるため引き続きサーベイを注意深く行う中、高線量のガラが他にも出てくる可能性がある。

Q. 高線量のガラが出た理由は。

A. 爆発の際に何らかの理由で付着したと考えている。

Q. 放出限度について、1プラント1キュリーと保安規定に記載があるとのことだが、今回の3号機からの放出においては、6プラント全体での放出限度と比較するのはおかしいのではないか。

A. 号機単位で考えるとその通りだが、発電所単位で考えると100倍ということ。

Q. 先日配られた津波の写真について。撮影日時が3時42分から始まっている。3時37分の第二波とのずれをどのように考えているのか。

A. 3時42分はカメラが持っている時間であり、正確な時刻かどうか不明。津波の第二波が来たのは3時35分であり、なぜズレがあるのかは不明。15時27分に襲来した第一波は検潮計では4mの高さで、10mの高さのT/Bには届かない。35分に来た第二波は7.5mの検潮計が壊れるほどのものであり、その際に浸水が始まったものと認識。

Q. カメラの時間が正しいとすると、3時42分に第二波が襲来したことになり、それ以前に電源喪失したことになる。本件は重要な事柄であり、カメラの時刻を検証すべきではないか。

A. カメラを再確認できるかも含めて確認する。なお、全交流電源喪失(SBO)は同時刻に発生したわけではなく、津波により順次電源がなくなっていったのが実態と思量。

Q. 海洋放出について。1Fに近い海域の海生物の調査は行わないのか。

A. 今後実施する予定。

以上